

## 付 属 資 料

- 資料 1 プロジェクト概要
- 資料 2 終了時評価 PDM 表
- 資料 3 計画達成度
- 資料 4 目標達成度
- 資料 5 活動実施状況整理表
- 資料 6 隊員へのアンケート結果 1・2・3
- 資料 7 派遣中隊員によるワークショップの結果
- 資料 8 合同評価ミニッツ
- 資料 9 フォローアップ・ミニッツ
- 資料 10 事業自己評価表
- 資料 11 事業評価会議実施報告書
- 資料 12 第三者評価報告書
- 資料 13 小國和子シニア隊員(プロジェクト調整員)の活動最終報告書



## 『チーム派遣プロジェクト概要』

- 1 プロジェクト名 : 南スラウェシ州バル県地域総合開発実施支援プロジェクト  
Implementation Support for Integrated Area Development Project in Barru District
- 2 ミニッツ署名日 : 1994年11月17日
- 3 協力期間 : 1995年1月1日 ~ 1999年12月31日
- 4 プロジェクトサイト : 南スラウェシ州バル県内の6村  
(Anabanua, Palakka, Tompo, Galung, Libureng, Harapan)
- 5 相手国実施機関 : 南スラウェシ州地域開発局 バル県地域開発企画局
- 6 関係機関 : 内務省地域開発総局/国家開発企画庁
- 7 要請背景 :  
インドネシア国の第5次及び第6次開発計画では、成長、公平性、安定の均衡が重要視されている。なかでも地域間格差の是正のため、東部インドネシアの開発や貧困の軽減が課題とされている。内務省の主導により、人材育成や生活水準の向上、環境と開発の両立などを基本方針とした地域総合開発プログラムを展開しているが、地方部においては、事業の効果的な実施や地域固有の問題に対処できる人材や経験が不足している。そのため、案件発掘調査を経て、開発プログラムの実施を支援するとの位置付けでインドネシア政府より協力が要請された。
- 8 プロジェクトの目的 :  
PPWTプログラム（総合地域開発）の実施を支援し、南スラウェシ州バル県内の6か村の農業収入向上に貢献する。
- 9 協力活動内容 :  
  - (1) 灌漑施設の修復及び建設と適正維持管理
  - (2) 栽培法の改良・普及
  - (3) 販売・流通調査による経営複合化、市場基盤整備策の提言
  - (4) 家畜飼養集約化の導入
  - (5) 副業生産の普及や付加価値の増加を含む実証調査および調査研究
  - (6) 生活用水確保、保健衛生基盤の整備などの生活環境の改善
- 10 活動の現状 :  
協力期間の後期に入り、先方実施機関の事業システム等を考慮し実施体制が整備されつつある中、インドネシアの経済危機から治安が悪化し、1998年5月には隊員全員が一時退避となって、各事業、特に農業分野に大きな影響を与えた。また1998年末からの豪雨により、隊員のプロジェクトサイトを含めてバル県各地で水害の被害が出ている。こうした困難な状況にもかかわらず、各隊員は全力で事業に取り組み、対象村の村人のやる気を引き出して事業を進めている。終了に向けて、各事業のこれまでの成果と課題を関係者が協力して取りまとめ、今後の事業の継続や他地域での展開に参考になるようなものにする。また、プロジェクト終了後、一部の事業については継続して協力する必要があるため、具体的なフォローアップの分野や方針等をインドネシア側と協議して行う。
- 11 問題点と今後の課題 :  
  - (1) 総合開発の実施を支援するという位置付けのため、プロジェクトの活動内容が幅広いことから、国内の技術的な支援体制を強化し、適宜隊員に対す

る技術指導を行う。

- (2) 先方実施機関は外部組織との共同事業の経験が豊かでないので、関係機関との連絡を頻繁にしつつ、十分な調整を実行する。
- (3) 最終年のまとめ及び終了時評価に向けて、隊員の活動の経験・成果をプロジェクトとして総合的に整理して取りまとめる。
- (4) プロジェクト終了後の協力方針を検討するにあたって、本プロジェクトにかかわった機関、関係者間で協議し、必要分野でのフォローアップの具体案を検討する。

12 協力実績 :

- (1) 隊員派遣：シニア隊員 4 名、短期緊急派遣隊員 4 名、一般隊員 15 名（活動中隊員は 10 名）
- (2) 機材供与：OA 機器、車両等

13 派遣隊員数及び職種 :

- (1) 家畜飼育 3 名
- (2) 食用作物 2 名
- (3) 農業土木 3 名
- (4) 村落開発 6 名
- (5) 市場調査 2 名
- (6) 野菜 1 名
- (7) リーダー 3 名（シニア隊員）
- (8) 調整員 4 名（短期緊急派遣隊員・シニア隊員）

14 他の経済・技術協力との関係：スラウェシ島派遣の専門家との情報交換。

15 調査団：

1994年 3月	事前調査
1994年 11月	実施協議調査
1996年 5月	実施計画打ち合わせ
1997年 11月	中間評価調査
1999年 2月	計画打合せ調査
1999年 12月	終了時評価調査

以上

## 南スラウェシ州バル県地域総合開発計画実施支援プロジェクト終了時評価 PDM

協力期間：1995. 1. 1～1999.12.31（5年間）

日本側実施機関：JICA 青年海外協力隊

相手側実施機関：国家開発企画局、内務省地域開発総局

対象地域：南スラウェシ州バル県バル群及びタネテリアジャ群内6カ村

ターゲットグループ：地域農民

作成日：1999.11.18

プロジェクトの要約	指標	指標データ入手手段	外部条件
<スーパーゴール> 地域農民の収入が向上する	1. 農民の生活レベル	1. 農家実態調査	
<上位目標> 農民の経済活動の生産性が向上する	1. 地域の農業生産量 2. 地域の農業生産額 3. 農業外収入額	1. 地方事務所の統計資料 2. 農家実態調査	
<プロジェクト目標> 村・農民の経済活動が活性化される	1. 農民の所有する情報、資材及びインフラストラクチャーの質と量 2. 農民組織の機能度	1. 事業評価会議実施報告書 2. 現地コンサルタントの調査結果 3. プロジェクト報告書 4. 農民への聞き取り	a. 政府が開発政策を変更しない b. 大規模な自然環境変化が起らない c. 地域の経済構造が大きく変化しない
<成果> 1. 農業システムが改善される 2. 人的資源が開発される（農民の開発に参加する活動が促進される） 3. 地方事務所の質が向上する 4. 農業支持基盤（インフラ等）が改善される	1-1. 各種調査結果と活用状況 1-2. 導入技術の内容と普及見込み 2-1. 研修、セミナーなどの実施状況 2-2. 農民の各プロジェクト活動への参加状況 3. 地方事務所員への研修、指導状況 4. 農業インフラ、生活インフラの整備状況と管理運営状況	1-1. 評価シート、報告書、関係者への聞き取り 1-2. 評価シート、報告書、関係者・農民への聞き取り 2-1. 報告書、関係者への聞き取り 2-2. 評価シート、報告書、関係者・農民への聞き取り 3. 報告書、関係者への聞き取り 4. 評価シート、報告書、現地調査	
<活動> 住民参加型アプローチを基本とする以下の活動を行う。 1. 簡易灌漑施設を設置する 2. 簡易灌漑施設の適正な保守管理を指導する 3. 作物栽培方法を改善する 4. 改善された作物栽培方法を普及させる 5. 市場運営方法や市場基盤整備策を提言する 6. 集約化された家畜飼養方法などを導入する 7. 地域の現状を調査し、必要であれば副業生産の普及や農産物付加価値の増加を試みる 8. 地域の現状を調査し、必要であれば生活用水確保、保健衛生基盤の整備や植林事業を行う	<投入> 日本側 1. 協力隊員の派遣：シニア隊員 7名、一般隊員 16名、短期緊急派遣隊員 2名 2. 研修員の受入： 8名 3. 機材供与： 43百万円 4. ローカルコスト負担： 41百万円  インドネシア側（州レベル、県レベル、農民レベルそれぞれの投入） 1. 土地の提供 2. 建物・施設の提供 3. カウンターパート及び関連職員の配置 4. ローカルコストの支出：1,345百万ルピア（約43百万円） 5. 資材の提供 6. 労力		a. 自然災害が起らない b. 気象条件に大きな変化が生じない c. 治安が悪化しない  <前提条件> a. 地域農民にプロジェクトが受け入れられる

## 計画達成度

プロジェクトの要約	指標	実績	影響した外部条件の変化
<スーパーゴール> 地域農民の収入が向上する	1. 農民の生活レベル	(現時点では、不明)	
<上位目標> 農民の経済活動の生産性が向上する	1. 地域の農業生産量 2. 地域の農業生産額 3. 農業外収入額	(現時点では、不明)	
<プロジェクト目標> 村・農民の経済活動が活性化される	1. 農民の所有する情報、資材及びインフラストラクチャーの質と量 2. 農民組織の機能度	1. 灌漑施設の建設・改修、作物栽培技術普及、市場改修、バリ牛・山羊飼育普及、生活用水施設整備など、村・農民の経済活動を活性化させる基盤、情報を提供した。 2. 灌漑施設維持管理、作物のグループ栽培、山羊の共同管理、市場の管理、生活用水施設管理など、農民組織による管理運営・活動が活性化しており、一部を除き、十分に機能している。	
<成果> 1. 農業システムが改善される 2. 人的資源が開発される(農民の開発に参加する活動が促進される) 3. 地方事務所の質が向上する 4. 農業支持基盤(インフラ等)が改善される	1-1. 各種調査結果と活用状況 1-2. 導入技術の内容と普及見込み 2-1. 研修、セミナーなどの実施状況 2-2. 農民の各プロジェクト活動への参加状況 3. 地方事務所員への研修、指導状況 4. 農業インフラ、生活インフラの整備状況と管理運営状況	1-1. 市場調査、ニーズ調査などの結果が、活動内容に反映されている。 1-2. トウガラシ、メロン、アカワケギなどの栽培普及が行われ、普及の見込みが高い。バリ牛、山羊のリボルピングシステムによる飼育普及が行われたが、結果を見るに至っていない。 2-1. 農民研修が4回実施され、プロジェクト終了時に県および州でのセミナーを実施し、農民も参加した。 2-2. 参加型アプローチにより、ほとんどの活動に農民が参加した。 3. プロジェクト関係者の日本研修受け入れを8名実施した。地方事務所員への技術移転は、カウンターパートとの関係が薄く、ほとんどなかったものと思われる。 4. 灌漑施設一ヶ所の建設、既存の灌漑施設三ヶ所の改修、市場三ヶ所の改修、育苗所の建設、生活用水施設5ヶ所の整備が行われた。育苗所に関しては、完成したばかりで稼働に至っていないが、管理運営は地方事務所が行うことになっている。他の施設は、農民自身による管理運営が問題なく行われている。	
活動> 住民参加型アプローチを基本とする以下の活動を行う。 1. 簡易灌漑施設を設置する 2. 簡易灌漑施設の適正な保守管理を指導する 3. 作物栽培方法を改善する 4. 改善された作物栽培方法を普及させる 5. 市場運営方法や市場基盤整備策を提言する 6. 集約化された家畜飼養方法などを導入する 7. 地域の現状を調査し、必要であれば副業生産の普及や農産物付加価値の増加を試みる 8. 地域の現状を調査し、必要であれば生活用水確保、保健衛生基盤の整備や植林事業を行う	<投入計画> 日本側 1. 協力隊員の派遣：シニア隊員 常時2名(リーダー、調整員)、一般隊員 常時6名(農業土木、食用作物、家畜飼育、市場調査、村落開発) 2. 研修員の受入：年間2名程度 3. 機材供与：車両、事務機器、その他 4. ローカルコスト負担：現地業務費 インドネシア側 1. 土地、建物、施設の提供 2. カウンターパート及び関連職員との配置 3. ローカルコストの支出	<投入実績> 日本側 1. 協力隊員の派遣：シニア隊員(チームリーダー、調整員)7名、一般隊員(農業土木、食用作物、野菜、家畜飼育、市場調査、村落開発)16名、短期緊急派遣隊員(村落開発、灌漑)2名 2. 研修員の受入：8名 3. 機材供与：43百万円 4. ローカルコスト負担：41百万円 インドネシア側 <中央レベル>予算配分：1,345百万ルピア(約43百万円)、関係機関の調整 <州レベル>調整員事務所、担当者の配置、予算執行 <県レベル>プロジェクト事務所、各地方事務所のカウンターパート11名、フルタイムカウンターパート(臨時雇用)9名、予算執行 <農民レベル>土地の提供、コストの負担、資材の提供、労力の提供	a. 99年1月に未曾有の大雨にみまわれる b. 98年の乾期は降雨の続く異常気象であった c. 99年5月総選挙に伴う治安の悪化により、2ヶ月間、隊員の一時退避を余儀なくされた

資料 4 目標達成度

目標達成度

(プロジェクトの「成果」が、「プロジェクト目標」の達成にどれだけつながるかその見込み検討)

プロジェクトの各「成果」が「プロジェクト目標」達成につながった度合い	
<p>灌漑施設、作物栽培方法、改修された市場、バリ牛・山羊とその飼育方法、生活用水施設、育苗所などのインフラストラクチャーや情報を村・農民に提供した。また、灌漑施設維持管理、作物のグループ栽培、山羊の共同管理、市場の管理、生活用水施設管理など、農民組織による管理運営・活動がプロジェクト活動を通じて活性化した。</p>	
成果の達成度	プロジェクト目標達成につながるのを阻害する要因
<p>成果 1 : 「農業システムが改善される」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>a. 市場調査が行われ、調査結果を活動に反映させた。</li> <li>b. トウガラシ、メロン、アカワケギなどの栽培普及が行われ、普及の見込みが高い。</li> <li>c. バリ牛、山羊のリボルピングシステムによる飼育普及により、飼育頭数が増えた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>b. トウガラシは大量に生産するようになったときの販路の開拓が必要である。治安の悪化による隊員の一時退避によりメロンの栽培指導が中断し、管理不十分で1作無駄にした。アカワケギは、豊作による価格の低下を経験した。</li> <li>c. 子牛、子山羊が生まれ始めたばかりで、まだ、返却に至っていない。</li> </ul>
<p>成果 2 : 「人的資源が開発される（農民の開発に参加する活動が促進される）」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>a. 農民研修や農業普及活動により、農民の知識が向上した。</li> <li>b. 各活動は住民（農民）参加を基本に行われたため、農民のオーナーシップと主体性が確保された。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>a. 目標達成と結びついていない知識である場合もある。</li> </ul>
<p>成果 3 : 「地方事務所の質が向上する」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>a. プロジェクト関係者の日本研修受入れを 8 名実施した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>a. 研修内容とプロジェクト目標の関連性が薄い研修もあった。</li> <li>b. 地方事務所員への技術移転は、カウンターパートとの関係が薄く、ほとんどなかったものと思われる。</li> </ul>
<p>成果 4 : 「農業支持基盤（インフラ等）が改善される」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>a. 灌漑施設 1ヶ所の建設、既存の灌漑施設 3ヶ所の改修が行われた。</li> <li>b. 市場 3ヶ所が改修された。</li> <li>c. 育苗所が建設された。</li> <li>d. 生活用水施設 5ヶ所が整備された。</li> <li>e. 生活用水管理委員会に見られるような農民自身による施設の管理運営組織が強化された。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>a. 建設された灌漑施設の用水路が大雨により損壊した。農民が土砂を取除いて取合えず取水が可能となっているが、本格的な改修が必要となる可能性がある。</li> <li>b. 育苗所は完成したばかりで、機能を発揮するに至っていない。</li> </ul>

活動実施状況整理表

活動項目	活動の実施状況	活動が成果へつなげた度合い		フォローアップの必要性
		成果への貢献	成果へ結びつかない面と理由	
1. 簡易灌漑施設を設置する	<b>灌漑施設建設</b> 1. 96/97年、パラッカ村カレンゲ集落ジェンバエ地区に堰と用水路からなる灌漑施設を施工した（施工は、基本的な資材をJICAが全て用意し、村から一部拠出金と労働力の提供を義務づけるかたちで行われた）。99年1月に大雨により用水路が損壊し、使用不能となっていたが、調査団が訪れた時には、農民自身が用水路の改修を行い、用水を確保していた。（受益者数：約20戸） 2. 98年、同集落ラトバン地区に別の施設を施工することを計画し準備を進めていたが、乾期にも雨が降り続く異常気象と、住民側の労働力が充分確保できなかったため、その年の工事を断念した。	1. 灌漑施設が損壊する前年に乾季の稲作が行われ、大きな収穫をあげており、灌漑の効果を農民が認めることとなった。	1. 大雨による損壊 2. 隊員の派遣が計画より遅れたため、活動開始が大幅に遅れた。 3. 治安の悪化による隊員一次退避により、隊員間の引継ぎが充分になされなかった。 4. 乾期の降雨により工事が遅れた。 5. 住民側への情報提供不足（住民は充分な情報のないままに工事が中止されたことに不満をもっている）	農民による管理・補修が継続される見込みである。大規模な補修は公共事業省によって行われる。したがって、フォローアップの必要性はないと思われる。
2. 簡易灌漑施設の適正な保守管理を指導する	<b>灌漑施設の改修</b> 99年、既設の灌漑施設の改修を3ヶ所で実施した。	1. 工事を農民が実施することにより、改修に必要な知識を農民が得ることとなった 2. 改修した施設による十分な用水が供給されるようになり、収量増しにつながった。		同上
3. 作物栽培方法を改善する	<b>トウガラシ、メロンの試験的導入</b> 1. トウガラシの栽培面積拡大と産地形成を目指し、99年2回の試験栽培を行った。 2. メロンの栽培と普及の可能性を探るため、98年、99年と試験栽培を行った。 3. 99年、雨期用の作物として、雨よけのメロン栽培を試験的に実施した。	1. トウガラシの栽培技術が向上し、生産量も増えた。 2. メロン栽培技術を取得した農家があり、栽培に意欲的である。	1. トウガラシは大量に生産するようになったときの販路の開拓が必要である。 2. メロンは、初期投資が大きいので、今のところ特定の農家しかできない。 3. 治安の悪化に伴う隊員の一次退避により、メロン栽培における重要な時期に指導出来ず、一作無駄にした。	栽培技術の普及のために、協力を続ける必要がある。

活動実施状況整理表

活動項目	活動の実施状況	活動が成果へつなげた度合い		フォローアップの必要性
		成果への貢献	成果へ結びつかない面と理由	
4. 改善された作物栽培方法を普及させる	<p><b>落花生優良種子普及</b> 97年、98年、バル県食料事務所の勧めにより落花生優良種子の普及を試みたが、普及には至らなかった。農家に種子を貸し付け、収穫後に同量返還させ、それを他の農家に配る方法がとられた。</p>	<p>1. 農家が落花生栽培における新技術（石灰施用、肥料投入など）を習得した。</p>	<p>1. 在米種と改良種に大きな収量差が認められない。 2. 現地作物事務所が協力的でなかった。 3. 雨期に稲作を行い、乾期に落花生を作る栽培体系での種子生産は、乾燥種子を雨期を越えて貯蔵する必要があり、発芽率の低下をまねいている。</p>	<p>事業は中断しており、フォローアップの必要性なし。</p>
	<p><b>農民研修</b> 1. 営農意識の向上と農家基礎知識・技術の向上を目的に、96年二回にわたり延べ農民30名、職員・普及員など10名をボゴール研修所へ送った。 2. アカワケギ栽培技術を習得させるために、97年に農民9名、職員5名、FCP1名、99年に農民6名、育苗所所員1名をNganjuk研修所へ送った。</p>	<p>1. 研修参加農家の知識が増した。 2. 研修参加農家のアカワケギの栽培意欲が増した。</p>	<p>1. 短い研修期間に多くを学んだため、しっかりした技術がみについておらず、研修の成果を圃場でみるのは難しい。 2. 県作物事務所による研修後のフォローアップが全参加者におよんでいない。</p>	<p>今後は、育苗所を活用した研修が可能であるため、この種の研修をする必要性は低い。</p>
	<p><b>アカワケギ栽培普及</b> アカワケギ栽培グループを組織させ、種子、肥料・農薬その他の資材を提供し、栽培グループ（3グループ、31名）による計画的作付けをさせた。研修参加者をグループの代表にした。</p>	<p>99年作は、豊作となったが、価格が低いいため、乾燥貯蔵し価格の上昇を待って販売するといった販売面の工夫をするようになった。</p>	<p>栽培グループ内で研修参加者その他の農民と栽培意欲の差がある。</p>	<p>農民に栽培意欲が出てきており、支援を続けることにより成果が期待される。</p>
	<p><b>育苗所建設</b> 食用作物事務所の活動拠点を村落内に築き、普及活動を効率的に行うための育苗所建設が計画され、97年より土地の確保（50アール）、井戸堀、資材の準備などが行われた。現在、事務所兼倉庫、堆肥小屋等を含む全ての施設が完成しているが、工事不良から貯水タンクの漏水が問題となっている。</p>	<p>地方事務所の機能強化となった。</p>	<p>完成が遅れたために、プロジェクト期間中に機能を発揮することができなかった。</p>	<p>運営は食用作物事務所が行い、スタッフも配置される予定であるが、運営面、技術面のフォローが必要である。</p>
5. 市場運営方法や市場基盤整備策を提言する	<p><b>市場調査および市場改修</b> 1. 市場調査を実施した。 2. 3ヶ所の市場を改修した。</p>	<p>市場の改修により、商人の数が増え、農民の経済活動の活性化を促した。</p>	<p>改修が不十分な市場がある。</p>	<p>なし（残された問題は、農民自身で解決できる問題である。）</p>

活動実施状況整理表

活動項目	活動の実施状況	活動が成果へつながった度合い		フォローアップの必要性
		成果への貢献	成果へ結びつかない面と理由	
6. 集約化された家畜飼養方法などを導入する	<p><u>バリ牛普及および山羊飼育普及</u></p> <p>1. バリ牛の飼育による収入の増加を目的に、繁殖牛を貸し付け子牛を返却させる事業を展開した。4カ村9集落より50戸を選び、各戸メス牛2頭づつ計100頭を貸与し、調査時点で母牛97頭子牛63頭となっていた。</p> <p>2. 繁殖が容易と思われた山羊の飼育普及を目的に、山羊銀行を女性グループ対象に行った。4カ村4集落を選定し、各集落5グループ（4～5名）に各5頭（メス4頭、オス1頭）づつ貸付けた。調査時点で、親山羊51頭、子山羊12頭となっていた。</p>	<p>牛又は山羊を取得した農民が、飼育方法や投棄の知識を得た。</p>	<p>子牛、子山羊が生まれ始めたばかりで、まだ、返却に至っていない。</p>	<p>子牛、子山羊の返却があるまで、いままじ見守る必要がある。</p>
7. 地域の現状を調査し、必要であれば副業生産の普及や農産物付加価値の増加を試みる	<p><u>カシューナッツ二次加工</u></p> <p>流通調査、農家調査、住民会議などを行い、女性の余剰労働力によるカシューナッツ二次加工事業を支援した。2集落で2つの女性グループを組織したが、調査時点で、1グループ8名だけとなった。</p>	<p>女性グループが収入向上に対して意欲的になった。</p>	<p>一回目の加工は、作業効率が悪く利益を生み出さなかった。また、2回目の加工は、カシューナッツの不作で実施できなかった。結局、加工に意欲を失い、他の収入につながる活動を模索するようになった。</p>	<p>なし</p>
8. 地域の現状を調査し、必要であれば生活用水確保、保健衛生の整備や植林事業を行う	<p><u>生活用水確保</u></p> <p>現地踏査、住民会議などから、生活用水施設整備のニーズが高いことがわかり、対象村内5集落で生活用施設整備をおこなった。事業実施における資金調達は、JICAの資金、PPWT予算、農民からの徴収といった3つの方法がとられたが、実施地区によって異なっている。施工は、基本的に隊員の支援を受けながら農民自身が行った。総受益者数は467戸である。</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>生活インフラが改善された。</li> <li>農民が簡単な水道施設工事の技術を身に付けた。</li> <li>生活用水管理委員会が設置され、管理運営ができるようになった。</li> <li>事業を通じて村落の自治能力が高まった。</li> </ol>		<p>整備中の生活用水施設があり、フォローアップの必要がある。村落の自治能力の向上が見られる中、いままじ機能強化を支援しモニターすることにより、一層の効果が期待される。</p>
	<p><u>トイレ設置</u></p> <p>住民ニーズ調査により、トイレ設置のニーズがあり、バル県がユニセフの支援で行っているトイレ設置事業に含まれていないバラッカ村チェンネ集落を対象に、トイレ設置の支援を行った。支援内容は資材の提供と技術面の指導のみであり、施工は農民自身が行った。設置総数は57個である。</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>生活環境が改善された。</li> <li>農民がトイレ設置技術を身に付けた。</li> </ol>		<p>バル県の事業で行われている集落が多く、必要性が低いいため、この事業はその後行われていない。</p>

## 協力隊員へのアンケート結果 1

(出来る限り回答に忠実に転記し整理した。但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

番号	回答者		1. 活動成果を上げられたか A)上げられた B)まあまあ上げられた C)あまり上げられなかった D)上げられなかった		2. 活動支援内容に満足しているか A)満足している B)まあまあ満足している C)少し不満である D)不満である		3. プロジェクトがインドネシアに及ぼした影響について		
	派遣時期	職種		障害となった事項		理由	州レベル	県レベル	集落・住民
1	94/3 ～ 96/4	チームリーダー (シニア隊員)	A	対象村数について実施協議以前には2カ村で計画していたが、結果的にインドネシア側が要求した6カ村としてのむこととなった。このため、実施中に全ての計画・構想を変更することとなり、後に多大な影響を残すこととなった。	A	シニア隊員派遣だったため派遣訓練を受けていない。事前・実施協議調査団において、金森秀行氏を団長にしてもらった点が活動支援内容として非常に満足している。当時、注目されていたためか、大使館、事務所からも多大な支援を受けた。	99年現在の状況からは想像できないほど、関った人たちが JICA 事業に不慣れであった。このプロジェクトのあとに別のプロジェクトも始まり、良くも悪くも州政府は JICA 事業に慣れた。	プロジェクト形成段階で県知事、BAPPEDA 局長に BAPPENAS・BANGDA 等中央政府との協議を通じ、かなり精神的な負担をかけた。その後、個人的な実入りも増加し、満足したであろう。但し、彼らも県政府以外に人事異動した。当時はプロジェクト開始当初ということもあり、お互いに混乱していたと感じる。	調査ばかりしていたため、必要以上に集落・住民に負の影響を及ぼした。
2	95/5 ～ 96/3	村落開発普及員 (短期緊急派遣隊員)	B			派遣前訓練はなかった。	JICA の1事業への理解	JICA の1事業への理解 JICA 事業との協調の困難さ	対象地域住民の意見を尊重し、住民の主体的事業への取組みを支援した事。全ての住民が均一に被益できなかった。
3	94/12 ～ 96/12,  98/5 ～ 00/2	村落開発普及員、  業務調整 (シニア隊員)	B		C	95年当時、「チーム派遣」「プロジェクト」についての特別のブリーフィングがなく、後続の隊員間で困惑がみられた。その後、この点については改善された(公募の時点での区別など)。今回の結果をもとに、更に個別派遣とは区別化してゆくか、よりよい形態を検討すべきであろう。	前半：特になし。隊員とのコンフリクトが生じイメージが悪い。 現在：少なくとも「バルの経験を他県に学ばせたいと言われるようになってきたと自負する。	関係技術事務所：当初設定されたような「職員への技術移転」「職員の人的資源の質向上」は殆ど達成されなかった。 フルタイム CP：既存の政府事業のあり方と比較し、隊員チームのアプローチから、仕事への姿勢など学んだひともいる。	1.具体的、物理的事業成果 2.外人と関わることによる全般的な社会的積極性の獲得、但し、自立的な村落開発にむけた意識的变化とまでいえるものは、まだまだ難しい。また、プロジェクト当初目標とされていた生計向上は測れる段階に至っていない。一方で、もともとあった支援への依存心を強化したような地域もあった。
4	94/12 ～ 97/12	家畜飼育	C	・十分な調査をする時間がなかった	B				

協力隊員へのアンケート結果 1

(出来る限り回答に忠実に転記し整理した。但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

番号	回答者		1. 活動成果を上げられたか A)上げられた B)まあまあ上げられた C)あまり上げられなかった D)上げられなかった		2. 活動支援内容に満足しているか A)満足している B)まあまあ満足している C)少し不満である D)不満である		3. プロジェクトがインドネシアに及ぼした影響について		
	派遣時期	職種	障害となった事項	理由	州レベル	県レベル	集落・住民		
5	96/1 ~ 98/1	チームリーダー (シニア隊員)	C	・ 隊員の技術力、国際協力に対する意識を考慮した枠組みではなかった。 ・ 仕事として働くという意味での準備が出来ていない隊員もいた。 ・ 隊員派遣が遅れがみであった。 ・ 予算の支出に柔軟性がなかった。	D	隊員の技術レベルがあまりにも低すぎる場合、シニア隊員あるいは隊員OBなどによる掘入れの必要を感じた。	協力隊によるチーム派遣というスキームに対する認知度は上がったと思われる。ただし、プロ技とどのくらい区別されて認識されているのかは疑問である。	日本、あるいは外国のスキームでの支援を受入れる場合のやり方を多少は理解してもらえた。 カウンターパート研修で日本に送ったスタッフが日本に対して好印象を持ったようだ。	不明。色々な種を播いてきたつもりではあるが、それらが実際に芽吹いたのか、実りを迎えたのか、今回の評価に期待する。
6	96/4 ~ 97/7	業務調整 (短期緊急派遣隊員)	C	1. インドネシアにおける協力隊活動の特殊な位置付け (ジュニアエキスパート) 2. 隊員間の人間関係	D	隊員の派遣が計画どおりできなかった 登録制等、現行の隊員確保方法の見直しが必要	中央政府と県が直接やりとりすることが多く、州に疎外感を与えた。	日本側の予算を当てにして進めているので、プロジェクト終了後、厳しい財政で、自分達で工夫しながら事業を計画推進できるか疑問。	住民参加型の事業を示すことができた (定着するかは今後の課題)
7	97/5 ~ 98/5	業務調整 (短期緊急派遣隊員)	B		C	プロジェクト調整員として派遣される際、JICA の会計業務の研修が実施されなかった。会計業務の研修を実施すべきである。実際には、前任者との引継ぎが例外的に認められたので、現場でのプロジェクト会計の手ほどきが得られ、概ね業務実施に支障はなかった。	JICA の事業で専門家でない形態の協力があることを示すことが出来た。 JICA は UNICEF 等の援助形態とは違うので、相手側負担の予算を得る面で混乱を生じさせた。	経済的な利益を得た (日本側の予算負担で実施した事業におけるイ側の実質負担減)。カウンターパートは県の行政職員の縁故者だった。よって、ネボティズムを助長したと言えなくもない。	・ 直接に経済的利益を得た (生活用水施設や灌漑施設による利益)。 ・ 日本人の姿を強調できた。 ・ 農業技術研修による農民の技術力、農業知識の向上。 ・ 悪い影響は特にない、強いて言えば、結果的に日本人とは対照的なイ側公務員への不信を増長した。
8	97/12 ~	チームリーダー (シニア)	C	・ インドネシア経済が悪化し、予算の流れに障害が多かった。 ・ 前任者のたてた計画の実施が困難で多大な時間をこれにさかなければならなかった。	C	国担当職員が多忙で、打合せの時間が、ほとんど取れなかった。もう少し、派遣前に詳しい説明が欲しかった。	地域開発の1例を示せたのではない。	州ほど組織がしっかりしていない (人材不足) ので良い影響、悪い影響についても今ひとつの感がある。	これまでのインドネシアの援助方法と違う手法でのアプローチに自助努力の重要性に気づいた村人が何人かいる。ただし、日本人が直接資金を投入する姿をみて益々甘えが見える村人もありこちらは悪影響。

協力隊員へのアンケート結果1

(出来る限り回答に忠実に転記し整理した。但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

9	95/7 97/11	～	食用作物	C	・異常気象など。 ・活動計画が適当でなかった。 ・村人の協力が得られなかった。	B		州レベルの注目はなかったと思う。	大変大きな影響があった。村人に日本人との交流を持つ機会を提供した。	大変大きな影響があった。村人に日本人との交流を持つ機会を提供した。
1 0	95/7 97/7	～	村落開発 普及員	D	協力隊は国（行政）と国（行政）の協力活動であるのに、隊員に行政実務経験を有するものが殆どおらず、責任を持った組織運営が行われていなかった。	D	ある隊員が精神的に不安定になり（インドネシア人を怒鳴りつけてしまう）インドネシアスタッフから多くの苦情（戦時中の日本人と同じだから帰国させろ）があっても、何のフォローもしなかった。	殆どない	日本人がどういう人間が身近に知ってもらえた。行政レベルでの技術伝達は殆どなかったのではないかと思う。	国を越えて信頼関係を持つことができた。
1 1	96/7 98/7	～	農業土木	B		B			活動をともにする事は殆どなかったが、少なくともプロジェクトのモデルケースにはなったと思う。	主に集落・住民レベルで活動をしていたので、少なからず技術移転は行えたと思うし、他集落を含む意識の向上ができたと思われる。
1 2	97/4 99/4	～	市場調査	B		A		それほどインパクトは無かったように思う	住民ニーズを取入れること。 予算・機材管理の厳正さ。 時間や約束に対する正確さ。 働き過ぎという印象。	主体性を持って自主的に働くこと。
1 3	97/7 99/10	～	野菜	B		A	JICA のバックアップは良いと思うが、イ側のこのプロジェクトに対するバックアップというか体制は全く出来ていなかったと思う。	殆どなし。州と県の役人のレベルの差は感じてくれたのではないか。	日本人のやり方はインドネシアのやり方と違うと思わせた。でも環境の整っていない現状では、自分達には無理と思ったであろう。トップの人間には、影響があっても、下の人間は感じられるほど動かなかった。	JICA プロジェクトに関わった人々はインドネシアのやり方の悪い所がわかるようになったのではないか。
1 4	97/7 00/1	～	村落開発 普及員	B				州のことは良く分からないが、州 BAPPEDA の人は JICA 事業に対する理解が深く協力的だという印象がある。	公務員には良くも悪くも影響を与えていない。	国際交流ができた。物質面でのメリットがあった。技術、知識、態度が向上した。

協力隊員へのアンケート結果1

(出来る限り回答に忠実に転記し整理した。但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

1 5	97/7 ~ 00/1	家畜飼育	B		B		上役の人がプロジェクトに興味をもち、視察に訪れた。	JICA がすぐに金を出してくれようという意識を植え付けた。	外国人に対する警戒心がなくなった。 援助なれさせてしまった。
1 6	97/12~	食用作物		現地語（ブギス語）の未習熟。 考え方の違い（文化、宗教からくるものも含めて）。	A		担当分野については影響は与えていない。	プロジェクトであるため、活動において金銭的に楽ではあったが、県農業局には、ODAについて大きな誤解を与えるものになった。	技術の移転。 ODAについての誤解を与えた。
1 7	97/12 ~ 00/1	家畜飼育	B	（プロジェクト目標＝農民の収入向上が活動の目標になるのであれば、全く達成されていない）	B	東京からの強化よりも JICA インドネシア事務所の改善を望む。CC が赴任したてだから仕事ができないというのはやめてほしい。	今後、どのようにプロジェクトを考慮するかによる。	物がもらえると思わせた。 BAPPEDA は何の影響も受けていない。 畜産事務所は、100 頭の牛がももれた。	牛がももれて良かった。 日本人と知り合いになれた。 薬が無料でももれた。 日本人は面倒なことを言うと思われたと思う。
1 8	98/4~	農業土木	C	自分の能力不足	A		現場で一生懸命仕事することの必要性が再認識された（？）	お金持ちで勤勉な日本の若者という考えが植え付けられたかも（？）	Pelaksana は Disiplin であるべきという認識（？）
1 9	99/7~	野菜	C	天候不順 販売先の確保 農民の意識が足りない	B		県の役人の業務改善に至らなかった。	JICA からの投資のおかげで機材提供をうけた。	トウガラシ、メロンの販売で利益を得ることができたが、資材はすべて JICA が提供したため、今後、自立して運営できるかどうか。

協力隊員へのアンケート結果 2 (出来る限り回答へ忠実に転記し整理した。但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

番号	回答者		4. プロジェクトを協力隊派遣で実施したことについて A) 専門家を派遣が良かった B) 協力隊が良かった C) どちらもいえない		5. 協力隊をチームで派遣することの得失は何だと思うか。		6. 今後、このようなプロジェクト実施するとしたら、どのような点に留意すべきか。		7. 個人的にはチームで派遣されたことは良かったか。 A) はい B) いいえ	
	派遣時期	職種	理由	メリット	デメリット			理由		
1	94/3 ~ 96/4	チームリーダー (シニア隊員)	B	6カ村を対象とした時点でやめるべきだった。2カ村であるなら、協力隊派遣でやるべき。予算面、波及すべき内容などから考え、このようなプロジェクトを専門家を派遣してまでやる必要は全くなし。	・いろいろな考えを統合して実施できる。 ・相乗効果	・バラバラの考えで個人個人が動く。 ・相乗的に悪い影響を及ぼす。	広い視野に立った国内支援体制の構築 (技術顧問はいらない) リーダー格の人は5年間関わる。			派遣したほうなので答えられない。
2	95/5 ~ 96/3	村落開発普及員 (短期緊急派遣隊員)	C	専門家でも協力隊でもできた。	・比較的まとまった具体的な事業を直接的に地域レベルで集中的に実施することができる。 ・現場で動けることを前提として形成されるチーム派遣は相手側にも歓迎されている。	枠組み、計画に硬直するとチーム協力効果が減ずるのみならずチームメンバーに不要なストレスを強いることになる。	事業は背景、状況が次々変化してゆくものなので、緊密な相手側との協調、調整の中で対処対応できるような体制をはじめの合意時から形成し随時問題点の整理解決を行うよう図る事だと思う。現在でも当初計画した枠組みや計画の要素や行政の対応体制に実施の中で不適合な部分が出てきた面について最善の対策を双方で考慮する為に巡回指導、中間評価もその役を担っているが、実際的には事務所がチームを支援する形で行政側と自在な対処を検討するタスクチームのような体制が必要か (?)	A		職務上チームメンバー (職種の異なる) の意見や印象をインドネシア側の意見と共に参考としつつ調査業務を進められる利点があった。

協力隊員へのアンケート結果2 (出来る限り回答へ忠実に転記し整理した。但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

番号	回答者		4. プロジェクトを協力隊派遣で実施したことについて A) 専門家派遣が良かった B) 協力隊が良かった C) どちらともいえない		5. 協力隊をチームで派遣することの得失は何だと思ふか。		6. 今後、このようなプロジェクト実施するとしたら、どのような点に留意すべきか。		7. 個人的にはチームで派遣されたことは良かったか。 A) はい B) いいえ	
	派遣時期	職種	理由	メリット	デメリット			理由		
3	94/12 ~ 96/12、 98/5 ~ 00/2	村落開発普及員、 業務調整(シニア隊員)	B 村落部に住み、生活を知り、人間関係を構築して事業を実施するという形をプロ技でできるとは思えない。但し、「政府間協力」事業としての位置付けとそれに伴う成果への期待、評価の必要性等を考慮すると、少なくとも形成における専門家(調査専門家など)との連携等が必要だったのではないか。プロジェクトという形をとることにより隊員は、どうしてもプロジェクトとしての枠にしばられる。それを前提に隊員のよさを生かしたプロジェクトが望まれる。	・1人(2年)では出来ないことを効率的な引継ぎと後任の確保を通じて達成できる。(円滑な派遣が必要) ・村落開発という広い範囲の活動において自分に対応できない事を相談し、協力隊員ができる	・相性のよし悪しによっては非常に難しい。 ・多分野が入りすぎて協力先機関との調整が難しい。 ・協力隊が「個性を生かした」や「自由に」といったイメージがあるとするれば、そういった意思を持った個人を集めてみても、結果的に個人派遣に比べてどれほどチームとして効果があげられるかは、人材に帰す。			A ・自分だけでは見えてこない、色々な村落開発、国際協力への視点(ポジティブ、ネガティブ)を他の人と活動することによって学び、刺激となった。		
4	94/12 ~ 97/12	家畜飼育		・多くのアイデアが集まる。	・(チームメンバーの)人間関係の問題がある。					

協力隊員へのアンケート結果2 (出来る限り回答へ忠実に転記し整理した。但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

番号	回答者		4. プロジェクトを協力隊派遣で実施したことについて A) 専門家派遣が良かった B) 協力隊が良かった C) どちらともいえない		5. 協力隊をチームで派遣することの得失は何だと思うか。		6. 今後、このようなプロジェクト実施するとしたら、どのような点に留意すべきか。		7. 個人的にはチームで派遣されたことは良かったか。 A) はい B) いいえ	
	派遣時期	職種	理由	メリット	デメリット			理由		
5	96/1 ~ 98/1	チームリーダー (シニア隊員)	B	<p>地方都市での草の根レベルの援助効果を上げるためには、カウンターパートへの技術移転よりも、協力隊のように村落で活動を行うような、実践の伴うスキームでなければ難しいと思われるため。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予算、活動実施のためのバックアップ体制、受入れ機関の認知度などが整っている。</li> <li>・活動を一定の期間継続的に行うことができ、活動の成果を定着するまでフォローがしやすい。</li> <li>・隊員が複数の職種存在するため、サイトにあったアプローチが選択でき、単独隊員よりも状況に合った活動が選択しやすい。</li> <li>・個人の技量の優劣を多少平均化できるので、全く駄目な状況を避けることができる。</li> <li>・スケールメリットが働く(いくつかの隣接する活動に相乗効果が生まれる)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・周囲の期待が高まり、それに応えるため無理をする場面が多くなり、好んでプロジェクトに参加していない人、個人の思い出作りなどを目的に協力隊に参加している人にとって、プロジェクトはあまり居心地が良くないと考えられる。(将来的に国際協力で活動したいと考える人にとっては、得難い経験になるのだが。)</li> <li>・上記にも関係するが、個人のやりたい事より、組織としての方向性が優先される場面もあるため、個人としては面白くない場面も多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チーム派遣を行い、年間活動予算だけでも2千万円以上も使うのである以上、より成果重視の姿勢とそのため体制作りを行って欲しい。特に、参加する隊員の技術力、意識はプロジェクト全体に大きく影響を与える事から、1)プロジェクトのコアとなる活動に関しては、シニア隊員などの活用により成果を確保し、他の隊員の活動に過重な負担が掛からないようにする、2)隊員に関しても、技術力、意識の点であまりにレベルが低いと思われる場合、短期のシニア隊員などを柔軟に投入できるようにする。あまり好ましいとは思えないが、コンサルタント、専門家の活用も将来的な課題であろう(コンサルタント、専門家の投入が主体になると、協力隊チーム派遣の意義があまり分からなくなる危険もあるが)。</li> <li>・プロジェクト実施前の調査・計画を強化する：初期の段階で、プロジェクト全体の枠組みを定め、活動を実施、モニタリングに必要な情報・データ等収集は隊員の手余る事なので、シニア隊員などの活用により、事前に集めておく必要がある。隊員に対するPCMの事前研修も進んでいるようなので、全体の枠組みを示し、プロジェクトの方向性を明確にするためにも、プロジェクト実施前のPDM作成などはもっとされて良いであろう。</li> <li>・予算執行の柔軟性：これは協力隊チームに限った事ではないが、特に、未熟な点が多い隊員にとって予算管理は不可能に近く、予算の単年度主義が実施の拙速につながる場面もあったように思う。</li> </ul>	<p>チームに参加する条件で参加したため、特にコメントなし。</p> <p>ただ、付け加えれば、チーム派遣のようなスキームでなければ、持続可能な援助になる可能性が低いと思えるので、チーム派遣以外は協力隊に参加する意義は感じられなかっただろう。</p>		
6	96/4 ~ 97/7	業務調整 (短期緊急派遣隊員)	B	<p>地方の寒村に泊まりこんで活動を進めるのは、専門家では困難である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チーム内で協力し、知恵、経験を出しながら進められる。</li> <li>・人員、予算の面から、より大規模、広範囲なことが出来る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一般的な協力隊イメージと異なるため、プロジェクト体制になじめずに終わる隊員がいる。</li> <li>・公募方式では、計画通り隊員が派遣されない可能性が多きい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プロジェクトを計画通り進めるには、隊員派遣が不可欠であり、その点から、応募者が少ない職種は避けた方が良い。</li> <li>・協力隊に馴染みがない地域、省庁ではプロジェクトを進めるべきでない。特に専門家プロジェクトが知られている場合は、スタンスの違いを理解してもらうのに、相当の努力、時間を要する。</li> <li>・分野・職種を絞り込んだ内容で進めるほうが、チーム内の協力体制が取りやすく、募集の問題にも対処しやすい。</li> </ul>	A	<p>貴重な経験を積むことができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・民族、宗教の異なる人々との触れ合い。</li> <li>・プロジェクトの会計業務(個人事業の経理に役立っている)。</li> <li>・人脈作り</li> </ul>	

協力隊員へのアンケート結果2 (出来る限り回答へ忠実に転記し整理した。但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

番号	回答者		4. プロジェクトを協力隊派遣で実施したことについて A) 専門家派遣が良かった B) 協力隊が良かった C) どちらとも いえない		5. 協力隊をチームで派遣することの 得失は何だと思うか。		6. 今後、このようなプロジェクト実施するとし たら、どのような点に留意すべきか。		7. 個人的にはチームで 派遣されたことは良かったか。 A) はい B) いいえ	
	派遣時期	職種	理由	メリット	デメリット			理由		
7	97/5 ～ 98/5	業務調整 (短期緊急派遣隊 員) (シニア)	C ・このプロジェクトは他の2つの専門家派遣プロジェクトと1つの塊的な援助としてイ側に提示され、特にジャカルタの中央関係省庁においてプロジェクト開始後もそういう認識が強かった。従って、日本側の事情として専門家派遣と協力隊派遣では条件がかなり違うことをイ側に伝えるのが大変困難なものとなった。その意味で、このプロジェクトが専門家によって行われていたならば、他のプロジェクトとの整合性も得られ、イ側とのボタンの掛け違いも小さいものとなったと思われる。 ・現場においては、やはり協力隊でなければ上げられない成果も多かったと思う。なぜなら、協力隊でなければ、直接の受益者である地域住民の実情を肌で感じて、事業を遂行することが困難であることが多いからである。日本人の顔を見せながら事業のインパクトを地域住民に示すことが出来るのは、協力隊の特徴である。 ・全体的に見て、このプロジェクトで求められていた成果を専門家派遣で達成出来なかったかという点と当然そんなことはない。実際、イ側の要求を取入れていくうちに、どんどんプロ技の体をなしていった感がある。しかし、安上がりであったこと、日本人の顔を示せたことにおいて、日本にとって利益があったと思う。	・ 隊員同士で情報を共有できること。 ・ 日本語の情報が多いこと。 ・ 異種の隊員が協力することにより、協力効果が有機的になりうること。 ・ 自分の専門でない開発関係の知識が身近にいる隊員から容易に得られること。 ・ 隊員が使える予算が、一般的に言って、多いこと。 ・ プロジェクト用の車両があるので、移動や物資の持ち運びに不便がないこと。	・ リーダーや調整員がいて煩わしい。 ・ 1人になれない。 ・ 予算書作成を強要されるのが煩わしい。 ・ どうしても金を使わなければいけないかのようだ。 ・ 報告書作成の頻度が高い。 ・ 隊員同士の間関係も面倒だ。 ・ 隊員の派遣人数に比べて、パソコンや車両の数が少ないので、要求される業務遂行を円滑に実施することが少々困難である。	一言で言うと、平らな地盤には頑丈な建物は建たないということ。つまり、このプロジェクトにおいて先ず問題なのは、実施の当初で日本側とイ側のプロジェクトに対する認識にボタンの掛け違いがあったことで、これが後々まで影響し、プロジェクト実施に非常に困難をもたらしたといえるので、今後は、このようなことが起こらないようにする必要がある。具体的に言うと、調査時やプロジェクト実施の取り決めの時に妥協しないことである。必要なら、実施を取りやめる勇気を持つことである。このことは、主に日本側の事情により達成が困難だと思うが、隊員を犠牲することや、援助実施国の誤解を増長することはもっと将来的な不利益が大きいのと思われる。	A ・ 会計業務や、交渉事など、色々新しい経験が出来て、非常に勉強になった。 ・ 日本人の友達が増えた。 ・ インドネシア人の友達が増えた。 ・ その他の国の友達が増えた。 ・ 個別派遣の時、自分で納得できなかった部分を挽回して満足を得た。以前の経験を生かして、押さえるところを押さえた効果的な業務が出来たと感じた。			

協力隊員へのアンケート結果2 (出来る限り回答へ忠実に転記し整理した。但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

番号	回答者		4. プロジェクトを協力隊派遣で実施したことについて A) 専門家派遣が良かった B) 協力隊が良かった C) どちらとも いえない		5. 協力隊をチームで派遣することの 得失は何だと思うか。		6. 今後、このようなプロジェクト実施する としたら、どのような点に留意すべきか。		7. 個人的にはチームで 派遣されたことは良かったか。 A) はい B) いいえ	
	派遣時期	職種	理由	メリット	デメリット				理由	
8	97/12～	チームリーダー (シニア隊員)	B	現地の公務員は事務所で、机上の計算と計画ばかり立てており、現場を知らない職員が多い。隊員はそれらの職員と異なり、先頭をきって村に入り、村人と直接ふれあう事で様々な事業が実施できたと思われる。	・他職種の隊員の考え方や手法が参考になる。 ・孤独感をあまり感じない。	日本人から離れて活動したいと思う隊員にはづらい。	・募集の段階から、チームでの活動を希望する人を集める。 ・今回のプロジェクトは5年間の中でチームリーダーが3名、調整員が4名派遣されているが、双方2名ずつの派遣が望ましい。任期を3年としても良いのでは?あまり頻繁に交代するとプロジェクトの流れに一貫性が保ちにくい。	A	1つの目標について、アプローチの方法に違いがあることをより具体的に知りえた。	
9	95/7～ 97/11	食用作物	B	村人とのコミュニケーションが最も重要で、語学能力に堪能なJOCVでないとならぬ。	活動経費が確保される	いじめや意見の相違による分裂	・小規模に的をしぼった活動 ・分野を少なくして集中した活動	A	他の隊員の考え、仕事のやり方について学べた。	
10	95/7～ 97/7	村落開発 普及員	C	協力隊でも社会経験を持った人が集まれば村でのプロジェクトは運んで行けたと思う。			チーム派遣のポイントは小さく始めて必要に応じて大きくしてゆくこと(予算配分も含めて)と出来るだけプロジェクト期間中5年間関わる人材を集めること。これらによって無駄な予算執行を防止できるし隊員も肩肘はらずに活動できると思われる。また、村人との間で信頼関係を持つ意思のある人を、ある程度長期にわたって派遣できるようにしてゆく必要がある。また、多額の予算を使う以上、失敗した場合には相応の責任をチームリーダーが取り、その経過を次のチーム派遣に活かせるようにしてゆく必要がある。また、日本で、関係者向けにプロジェクト終了後報告会をして欲しい。	B	ソーシャルワーカーとして日本で10年以上貧困対策の仕事をしてきたが、チームリーダーが全く理解せず、箱モノづくり(水道、灌漑)優先としたため、自分の能力、経験を活かせなかった。はっきり言ってチームのメンバーに社会人として未熟な人が多かった。	
11	96/7～ 98/7	農業土木	A	成果が求められていたので、任国(カウンターパート等)とのつながりをまずして物質的な協力を行ったきらいがある。又、日本、任国両方とも形(物質的な)に残る成果を期待したのではないのか。	予算があるので、任国の協力が得られなくても、ある程度の(物質的な)成果は達成できる。	予算にしばられる。任国の協力が得られるまで待てない。	プロジェクト事務所を設けず、各職種の隊員が各省庁へ配属される形を取るべき、それを踏まえてシニア等調整員が全体の連絡のまとめをするのがベスト。	B	日本人にたよったしまった面も少なからずある。本当は、1人任地でどこまでできるか試してみなかった。	

協力隊員へのアンケート結果 2 (出来る限り回答へ忠実に転記し整理した。但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

番号	回答者		4. プロジェクトを協力隊派遣で実施したことについて A) 専門家派遣が良かった B) 協力隊が良かった C) どちらもいえない		5. 協力隊をチームで派遣することの得失は何だと思うか。		6. 今後、このようなプロジェクト実施するとしたら、どのような点に留意すべきか。		7. 個人的にはチームで派遣されたことは良かったか。 A) はい B) いいえ	
	派遣時期	職種	理由	メリット	デメリット			理由		
12	97/4 ~ 99/4	市場調査	C	<ul style="list-style-type: none"> <li>プロジェクト目標に対して、協力隊というスキームでなければならなかったとは考えられない。しかし、プロジェクトは協力隊プロジェクトになっており、その良さは十分に発揮された(住民との交流等)。</li> <li>プロジェクト形成段階で協力隊ありきだったように感じることもあるが、1つ言えることはプロジェクト目標や投入について計画性があった方が良かった(協力隊の良さ悪さ)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>色々な分野の人と協力してプロジェクトを進められる。</li> <li>友達ができる</li> <li>活動について相談や議論ができる。</li> <li>ストレス発散のため、一緒に余暇を楽しんだ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本人だけでかたまるケースが多い。</li> <li>語学が上達しない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>協力機関と同じ事務所にする。</li> <li>C/P はアルバイト等の臨時職員では技術移転以前に問題が多い。</li> <li>住民や公務員の生活レベルに合わせ村内ではバイクを使用する。</li> <li>プロジェクト内で(日本側)で PDM 的なものは作成すべきである(日安として)。(相手側と同意する必要なし)</li> <li>チーム内のルールをしっかり作る。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>1つの組織として活動できたから。</li> <li>予算が確保されていた。</li> <li>大切な友人を得ることができた。</li> <li>開発に関して色々考えることができた。</li> </ul>	
13	97/7 ~ 99/10	野菜	C	<p>専門家が自分達と同じ環境、同じ条件で活動していても結果は同じだった。逆に協力隊員が専門家と同じ環境、条件で活動していたら、成功していたかどうかは別として、もっとイ側を引き込めていたのでは？</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>色々な隊員の意見が聞けた。</li> <li>予算がつくこと。(結局、チームのメリットを感じられるほど各職種の隊員が有機的に活動できるところまで行かず、個々の分野の活動を立ち上げるだけで精一杯だった。)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>予算を消化しなければというプレッシャー。</li> </ul>	<p>まず、プロジェクトを始める前の下準備をもっとしっかりやっておくべき。プロジェクト対象と成果の目標設定を決め、その上で隊員、予算規模、途上国の関わり方を確定してからスタートするべき。</p> <p>途上国の関わり方が一番大事、地方と中央の間では言うことが違うし、現実に隊員と共に活動する人間の能力を見極めて欲しい。専門家と違って隊員の場合、本当に人と人の技術移転なのだから。</p>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>予算もあるし、自分で計画、実行することができた。</li> <li>活動について他の隊員の意見も聞けたし、色々な情報交換もできた。</li> <li>日本のやり方と途上国のやり方の違いが分かり勉強になった。</li> </ul>	

協力隊員へのアンケート結果2 (出来る限り回答へ忠実に転記し整理した。但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は判愛した。)

番号	回答者		4. プロジェクトを協力隊派遣で実施したことについて A) 専門家派遣が良かった B) 協力隊が良かった C) どちらとも いえない		5. 協力隊をチームで派遣することの 得失は何だと思うか。		6. 今後、このようなプロジェクト実施するとし たら、どのような点に留意すべきか。		7. 個人的にはチームで 派遣されたことは良かったか。 A) はい B) いいえ	
	派遣時期	職種	理由	メリット	デメリット			理由		
14	H97/7 ~ 00/1	村落開発 普及員	C 「協力隊でなければ」とは思わ ないが、住民参加を喚起するた めには、地元を据えて草の 根の活動をする隊員にメリット がある。しかし、サステナビリ ティを持たせるためには、地方 政府のパフォーマンスを高め ることがどうしても必要とな る。そのためには、専門家の方 が影響力がある。(協力隊員のイ 語約である Tenaga Abli Muda は、どうしても大学生のボラン ティア活動のイメージがあるら しい。) 提案：まず南スラウェシ貧困対 策プロジェクトで専門家チーム がやっている地方政府、主に PMD (村落開発総局) のパー フォーマンスを高めるプロジェ クトを入れ、その後、コンセプト など JICA に対する理解を高め、 力のついた地方政府と共に事業 を実際に行うために、隊員によ るチーム派遣プロジェクトを入 れた方が両方のプロジェクトの シナジー効果が望め、しかもフ ォローアップもでき効果的だと思 う。	・プロジェクトへの 関わりチーム活動に より、自分の組織に おける能力を高めら れる。 ・資金的に比較的大 掛かりな事業がで き、資金の融通性が ある。 ・現地政府に対する 影響力、権威が個人 派遣に比べて増す。 ・各分野の参加によ りプロジェクトのシ ナジー効果が望め る。	活動が個人派遣と 比較して制限を受 ける (プロジェ クト方針、リーダー 方針より)。	・要請主義を徹底させる。要請のないところにプロジェ クトは入れない。 ・こちらの要求すべき点をクリアさせることを条件 に、その後プロジェクトを入れる。(カウンターパート の件はもっとネゴして欲しかった。) 要求を満たさな ければ、プロジェクトを入れなくて良いのではないか。 ・各分野のアイデアを統合させようと努力すべき。例え ば、育苗所の事業は各分野のアイデアを総合すれば、多 目的施設として、もっと意義あるものになったと思われ るが、そのような機会を作らなかった。 ・問題系図、目的系図、PDM をキチンとやり、それら にある程度権限を付与しておくことにより、評価の際の 混乱を避け、各隊員の発案する活動内容がプロジェクト に合っているか否か判断する材料になる。 ・隊員が並列の地位にあり、リーダーがいることで隊員 をうまく調整し、事業に統合性を持たせることができ る。そうでないであれば、各分野の隊員の関わり方 について明確な図式 (ジョブディスクリプション) が始め にあれば、よりお互いが関わり合いやすくなる。 ・協力隊であることに遠慮し、通常のプロジェクトの必 要事項を端折ると逆に協力隊員が足を取られ苦勞する。 (例；評価基準・方法の削除) 別にプロジェクトだつたら プロジェクト方式に従う覚悟はあるので、どっちつか ずはやめて欲しい。 ・プロジェクト目標の設定に最も注意する。「農民の収 入向上」という大目標が協力隊の行う草の根援助にとつ て狭すぎる目標設定であった。「農民の生活向上」だつ たら、こんなに悩まなくて良かった (もっと色々できた)。	A チームの方がお互いに 学び合え、皆で同じ目 標に向けて協力し合え るので楽しい。また、 チームで働くための能 力や、チームを運営す るための能力が身に付 く。			

協力隊員へのアンケート結果2 (出来る限り回答へ忠実に転記し整理した。但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

番号	回答者		4. プロジェクトを協力隊派遣で実施したことについて A) 専門家派遣が良かった B) 協力隊が良かった C) どちらとも いえない		5. 協力隊をチームで派遣することの 得失は何だと思うか。		6. 今後、このようなプロジェクト実施するとし たら、どのような点に留意すべきか。		7. 個人的にはチームで 派遣されたことは良かったか。 A) はい B) いいえ	
	派遣時期	職種	理由	メリット	デメリット				理由	
15	97/1 ~ 00/1	家畜飼育		<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な職種の隊員の専門的な意見が参考になる。</li> <li>・皆の知恵を出し合って活動できる。</li> <li>・日本人が多くいることで精神的な面がカバーできる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人の個性が強くて、自分の意見をゆずらない。</li> <li>・毎日、日本人と接していて、インドネシア語がなかなか上達しない。</li> <li>・毎日、日本人がいることが返ってストレスになるときがある。</li> </ul>			初めの調査期間に長く時間をかけて、プロジェクトを予定している土地のニーズをはっきりさせてから始めるべき。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他隊員の意見に押されて自分のやりたことを思う存分できなかった。</li> <li>・私の性格でしょうが、ガンガン言われて萎縮してしまうことが多く、落ち込むことも多かった。しんどかった。</li> <li>・事務的なことを全く知らなかったため、初めはつらかった。周りが全てテキパキした人ばかりで、なんで自分は、と思うことが多かった。</li> </ul>

協力隊員へのアンケート結果2 (出来る限り回答へ忠実に転記し整理した。但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

番号	回答者		4. プロジェクトを協力隊派遣で実施したことについて A) 専門家派遣が良かった B) 協力隊が良かった C) どちらともいえない		5. 協力隊をチームで派遣することの得失は何だと思うか。		6. 今後、このようなプロジェクト実施するとしたら、どのような点に留意すべきか。		7. 個人的にはチームで派遣されたことは良かったか。 A) はい B) いいえ	
	派遣時期	職種	理由	メリット	デメリット				理由	
16	97/12～	食用作物	C ・ 協力隊による派遣であるために、プロジェクトの目的や評価法がかなりあいまいであった様に思われる。成果があろうがなかろうが2年がんばればよし、という協力隊体制では、プロ技のようにしっかりとした目的を持ち続けることは難しいのかも。 ・ Aにしなかったのは、プロ技についてまるで知識がないから。 ・ 協力隊に求められているのは技術移転だけではないと良く言われるが、プロジェクトの大口標は「農家の収入向上」にあり、それは協力隊に求められている他の目的「交流」などでは成し得ないと思う。つまり、技術移転が前提であったことを思えば、協力隊の投入は正しかったのかどうか疑問。	有るのでしょうか？	問4と同じ答え			・ プロ技がどういうものであるかは知らないが、協力隊としてプロジェクトを構成するのは、おかしい。協力隊は基本的にボランティアであり、プロジェクトのように活動の自由度に制限を加えられているものが合っているのかどうか疑問である。プロジェクトを効果的なものにするためには、3～5年位のチームで考える必要があり、つまり、1つの活動が隊員が変わるたびに変わっていたのでは、効果的でない。そうなると、自由意志で参加した者であっても、活動を自由に展開したのではプロジェクトの利点が損なわれる事になる。これは、チームの長い農業・畜産の分野で最も言える事ではないだろうか？つまり、協力隊という形でのプロジェクト参加は、私がおもうに“変”ということである。 - それでも、どうしても協力隊でやるというなら - ・ プロジェクトの目的と評価法をしっかりと持ち（持たなくともミニッツを結ぶ前にある程度議論しておくべき事）、プロジェクトを起動させる。 ・ 対象村落を絞る事（このプロジェクトの対象村は多すぎる）。	A	仕事のできる多くの人達と共に活動できた事は個人的に大きな財産と考える。

協力隊員へのアンケート結果2 (出来る限り回答へ忠実に転記し整理した。但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

番号	回答者		4. プロジェクトを協力隊派遣で実施したことについて A) 専門家派遣が良かった B) 協力隊が良かった C) どちらとも いえない		5. 協力隊をチームで派遣することの 得失は何だと思うか。		6. 今後、このようなプロジェクト実施するとし たら、どのような点に留意すべきか。		7. 個人的にはチームで 派遣されたことは良かったか。 A) はい B) いいえ	
	派遣時期	職種	理由	メリット	デメリット			理由		
17	97/12 ~ 00/1	家畜飼育	B	農民層に直接日本の援助が届いたから。(吸収されただけかも知れないが。)しかし、公務員の体質改善につながらなかった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・色々な職種で力を出し合える。</li> <li>・予算とシニアがつく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本来、自由にやれることだけ(マンパワーの範囲で)やって元気で帰ってくればよいという協力隊には、あるまじき(?)状態である。</li> <li>・チームでいると他人と競合してしまうので協力隊本来の自由さが失われる。</li> <li>・お金がつくことで他の隊員からうらやましがられる。</li> <li>・形(成果)にしないでという脅迫観念にかられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・協力隊で派遣するよりも別の方法をとってはどうか。</li> <li>・協力隊枠で募集をかけても良いが、何か特別な措置(あるいは説明)をつけるべきではないか。</li> <li>・シニア隊員の影響を強くうけることを考慮すべき。</li> <li>・村落開発という総合的なプロジェクトと、同職種のみを集めたチームというのは別だから、よくわからない。</li> </ul>	A	1人でやるよりも活動範囲が広く、事務所が別だったことで地域の役所にとらわれなくて済んだ。 牛を100頭もいれられるほどお金が使えた(形になったので、レポートが書きやすかった)。でも、それだけ良心(?)が痛み(?) (他の隊員よりも膨大なお金、税金を使っているということで)、ボランティアのはずが辛かった。	
18	98/4~	農業土木	A	専門家の方が経験と知識があるだろうから。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本人どうしの方が情報伝達が早い。</li> <li>・予算が充分ある。</li> <li>・車両、設備の使い回しができる。</li> <li>・1つの現場で連携した計画をたてられる。</li> <li>・乗り込み時、そこでの活動が長い隊員から人を紹介してもらえる。</li> </ul>	行政機関との関係が希薄になる	<p>事前の調査・計画時にそれぞれの専門分野の人が検討する。</p> <p>基本方針はどの分野の障害にもならないようにする。</p> <p>できれば、一つ一つの分野が(複数が1つの)チームとして行政機関に入る。</p> <p>強い権限をもつ。</p>	A	問5のとおり	

協力隊員へのアンケート結果 2 (出来る限り回答へ忠実に転記し整理した。但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

番号	回答者		4. プロジェクトを協力隊派遣で実施したことについて A) 専門家派遣が良かった B) 協力隊が良かった C) どちらとも いえない		5. 協力隊をチームで派遣することの 得失は何だと思うか。		6. 今後、このようなプロジェクト実施するとし たら、どのような点に留意すべきか。		7. 個人的にはチームで 派遣されたことは良かったか。 A) はい B) いいえ		
	派遣時期	職種		理由	メリット	デメリット				理由	
19	99/7～	野菜	A	資金投入の額が大きいため。	・活動範囲が広まる。 ・お金を有効に使用できる。(大きいプロジェクトができる) ・長期間、活動できる。	お金に頼ってしまう。		目的を見失わないこと。 投資の前に十分な調査(必要性、機能性)をする必要がある。		B	・資金の面で専門家のようだから。 ・日本人が多い。確かに助かる面も多いが、職場(事務所)は、日本的で現地のシステムが見えにくい。

協力隊員へのアンケート結果3

(出来る限り回答に忠実に転記し整理した、但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

番号	回答者		8. 技術移転以外で行った国際交流 A) ある B) ない	9. 協力隊派遣による考え方の変化 A) ある B) ない	10. 帰国後のC/Pや任国の友人との連絡 A)ある B)ない	11. 帰国後、協力隊の経験を活かして国内で行った活動があるか A) ある B) ない	12. チャンスがあればもう一度、国際協力に参加したいか A)はい B)いいえ	
	派遣時期	職種	内容	内容	内容	内容	内容	
1	94/3 ~ 96/4	チームリーダー (シニア隊員)	B	A 私はチームの隊員、チームリーダー、個別派遣のシニア隊員、個別専門家、プロ技専門家（現在進行形）を経験してきた。任務終了した際には、毎回自分自身の考え方に大きな変化がある。それは、仕事の仕方、行った仕事の結果についての考察、色々な人たちとの接触などによって、影響されていると思う。そして、それらの結果は、多くは新しく知り得たこと、体験したことにより、自分の人間の幅を広げています。（狭めているのかもしれませんが・・・）	A	A	A 母校（大学）およびその他の大学で経験談を話した。（ただし、協力隊活動についてだけではない）	A（今もしていますが・・・）
2	95/5 ~ 96/3	村落開発普及員 (短期緊急派遣隊員)	B	A 短期の調査派遣であり、不可能。	A	A		
3	94/12 ~ 96/12  98/5 ~	村落開発普及員、  業務調整 (シニア隊員)	B	A ここで述べたすべてのコメントが、今回、前回の派遣を通じて学んだことである。ただ、自分にとって協力隊参加は村落開発実践に関わるための手段の1つとして捉えていたため、協力隊であることそのものがどれだけ自分に影響を与えたかは定かでない。むしろ、一様な協力隊イメージは悩みの種だった。一般的な事でいえば、色々な人に出会い、「世の中には色々な人がいるな」と感じた。カルチャーショックは対外国人のみならず。	A	A	A 母校（大学）での発表。 インドネシア関係のセミナー、イベントへの参加。	A でも、協力隊チーム派遣への関与はまとめて終わりにしたい。違った形態で新たな可能性を模索してゆければと考える。
4	94/12 ~ 97/12	家畜飼育	B	B	B	B	B ODA や NGO だけが国際協力とは思わない。東南アジアには数多くの企業が進出し、企業を通じての技術移転が可能であり、有効であると考ええる。協力隊・専門家の活動は利益への追求がない。支援する側が利益の追求を考えて活動しなければ効果はない。（特に専門家）	

協力隊員へのアンケート結果3

(出来る限り回答に忠実に転記し整理した、但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

番号	回答者		8. 技術移転以外で行った国際交流 A) ある B) ない	9. 協力隊派遣による考え方の変化 A) ある B) ない	10. 帰国後のC/Pや任国の友人との連絡 A)ある B)ない	11. 帰国後、協力隊の経験を活かして国内で行った活動があるか A) ある B) ない	12. チャンスがあればもう一度、国際協力に参加したいか A)はい B)いいえ
	派遣時期	職種					
5	H7~H9	チームリーダー(シニア)	A	B	B	A	A
			日本研修に送るための準備として、英語が必須だったため、3ヶ月程度、週一回英語を教えた。			民間コンサルタントとして職についている。	職業としての国際協力に加え、色々なチャンネルでの国際協力に協力できればと思う。
6	96/4 ~ 97/7	業務調整(短期緊急派遣隊員)	B	B	B	B	A
7	97/5 ~ 98/5	業務調整(短期緊急派遣隊員)	A	A	A	A	A
			・ユニセフ職員とゴルフをしながら情報交換。ときどき。 ・ウジュンパンダンの日本人子弟、及び其れに準じるものに対して数学を教えた。週一回、1年間。 ・日本人会主催の国際ソフトボール大会参加。随時。 ・インドネシア人、外国人混合のジョギングクラブ参加。ときどき。	・以前よりも粘り強くなったこと。 ・簡単には人を信用しなくなったこと。 ・迷いがあってもきっぱり判断するようになったこと。		・二本松訓練所においてインドネシア派遣隊員候補生に対して、任国事情を講義した。 ・JOCA主催のインドネシア青年招聘事業において、日本人参加に対するインドネシア事情を講義した。 ・現在所属している大学において、インドネシア総選挙実施支援における専門家活動について紹介した。	
8	97/12~	チームリーダー(シニア)	B	B		A	A
						協力隊募集説明会や育てる会の婦国報告会等で活動経験を発表したことが数回ある。	
9	95/7 ~ 97/11	食用作物	A	A	B	B	A
			子供に英語、日本語を教えた。1~2日が3回くらい。	国際協力の現実を把握した。			

協力隊員へのアンケート結果3

(出来る限り回答に忠実に転記し整理した、但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

番号	回答者		8. 技術移転以外で行った国際交流 A) ある B) ない	9. 協力隊派遣による考え方の変化 A) ある B) ない	10. 帰国後のC/Pや任国の友人との連絡 A)ある B)ない	11. 帰国後、協力隊の経験を活かして国内で行った活動があるか A) ある B) ない	12. チャンスがあればもう一度、国際協力に参加したいか A)はい B)いいえ
	派遣時期	職種	内容	内容		内容	
10	95/7 ~ 97/7	村落開発普及員	A 日本語を地元の中学生に6カ月間教えた。	A 協力隊が制度として運営されているのに、責任の所在が明確でなく、活動も個人に委ねられているのに驚いた。	A	A 横浜市役所、神奈川県庁の職員に活動報告を数回行った。また、JICAの国総研の自治体研修でも2回活動報告をした。神奈川県立高校で高校生に活動報告した。在日インドネシア人の生活支援の会を催した(インドネシア大使館後援)。	A 横浜市の海外事務所か、地方自治(福祉)のJICA専門家か、NGO職員として。
11	96/7 ~ 98/7	農業土木	B	A 全体的に余裕ができ開き直れるようになった。			
12	97/4 ~ 99/4	市場調査	A ・日本語教室を行った。その内の1人が文部省の試験に合格し、現在鹿児島大学で勉強中(教育マネジメント)。 ・隊員有志によるクラブ活動(奨学金プログラム;結果的に情報収集・提供まで)(占着の支援)	A ・あまり深く悩まなくなった。 ・「豊かさ」に対する考えが変化した。 ・国際協力に対する情熱が強まった。 ・世界について、貧困について、考えるようになった。	A	A ・NGOの手伝い。 ・留学生の支援。	A
13	97/7 ~ 99/10	野菜	A バル郡サッカー大会(ガルンカップ;ガルンは住んでいた村の名前)、年1回で計2回開催した。出場チーム20チーム(JICAチームも参戦)。99年はバル県知事も参戦した。	A 日本人は働きすぎだと思い、南の島でボケボケ働くのが夢だったが、ボケボケ働くインドネシアの公務員と一緒に働いた結果、やはり自分は日本人だと思った。確かにボケボケやるのは楽だが、成果は上がらない。やる時は苦しいが、完成したり成功した時の満足感は日本式の方が上。	A	B	A

協力隊員へのアンケート結果3

(出来る限り回答に忠実に転記し整理した、但し、質問の主旨から外れていると思われる部分は割愛した。)

番号	回答者		8. 技術移転以外で行った国際交流 A) ある B) ない		9. 協力隊派遣による考え方の変化 A) ある B) ない		10. 帰国後のC/Pや任国の友人との連絡 A)ある B)ない	11. 帰国後、協力隊の経験を活かして国内で行った活動があるか A) ある B) ない	12. チャンスがあればもう一度、国際協力に参加したいか A)はい B)いいえ
	派遣時期	職種		内容		内容		内容	
14	97/7 00/1	～ 村落開発 普及員	A	・モロヘイヤ普及活動を日本の国際NGO種子返し運動との協力のもと行い、県、州の保健局を中心に活動した。現在こちらのNGOと協力して活動を行っており、栄養士か保健婦の隊員を派遣してもらえよう交渉中。(約1年間) ・インドネシア協力隊員による奨学金支援活動(約2年間) ・ガランカップ(上記)	A	・カウンターパートをはじめとして、人材を育てる喜びを発見し、そのための能力を高めることができた。 ・「人作り＝国作り」であるし、援助の基本は人を育成することであるということが経験を通じて実感できた。 ・今後チームで有効に働くことができる自身がついた。 ・技術は役立つ前は知識でしかない。 ある分野におけるプロジェクトの戦略を練るのは、必ずしもその分野の専門性がある人がベストだとは言い切れない。戦略は自由に発想を取り入れた方が多い場合が多い。 ・下手な鉄砲であるなら数を打てばよい。とにかく精力的に活動すれば何らかの道は拓ける。			A ぜひチャンスをと!
15	97/7 00/1	～ 家畜飼育	B		A	・旅行で外国に出ると仕事で外国に出るとは全く状況が違ふと感じた。 ・自分自身、性格がひねくれてしまった。 ・村落開発がこんなに難しいものだとは思わなかった。			A 今度は個人で。
16	97/12 00/1	～ 食用作物	B		A	人間の行動について学ぶ事が多かった。動機付けされた人の行動は、そうでない人の行動との成果の面から見た違いを深く認識した。派遣前に意識してなかった事でもあり新鮮であった。			A まだ、活動中であるが、答えは“はい”
17	97/12 00/1	～ 家畜飼育	B		B	・任国を好きになるものだと思っていたが・・・、親しみはあるけど好きじゃない。 ・日本は物や金ばかり援助して「本当の援助」をしていないというわさを半ば私も信じていたが、はっきり言って「物や金」を欲しがらるものだということが分かった。物質的なもの以外の援助は内政干渉と紙一重までいってしまいそうな気がする。 ・日本で考える「困っている人」や「貧乏な人」の実際が少しわかった。日本人のモノサシで援助してはいけないと思う。援助の価値は金額では表せないと思う。援助は無償だと思っているような雰囲気があるのが分かった。＝返す気がない。自分が借りてるんじゃない。			
18	98/4～	～ 農業土木	B		B				
19	99/7～	～ 野菜	B		B	前と変わらず、心(気持ち)を使った活動をしていきたい。しかし、お金や利益がないとスムーズにいかないというが、初心忘れずでいこう。			